

奈良国立文化財研究所要項

一、調査研究概況

A 総合研究

1 平城宮跡発掘調査

平城宮跡発掘調査部

本年度は第16～23次の8回にわたって調査をおこなった。(本文11頁・30頁参照)

2 西大寺調査

美術工芸研究室

本年度は従来の各部門の総合調査の成果を検討するとともに、観尊研究と関連させて絵画部門では算師堯尊の研究、彫刻部門では善派仏師の研究、工芸部門では観尊舍利塔の研究をすすめた。なおこれにともなつて、南都教学の背景を検討するために、笠置寺の調査もあわせて行った。(本文15頁参照)

B 各個研究

I 美術工芸研究室

1 舍利塔の様式的研究

前々より引き続き舍利塔の様式的研究を行つていゝ。一応、調査を終つた作品は公表した。さらに逐次公表の準備を進めているが、今回は、舍利塔と宗団とに特種関係が見られるか、どうか、その点に検討を加えてみた。

2 美術工芸作品の伝統的系譜の研究

奈良国立文化財研究所要項

工芸作品の分野は広い。工芸作品の各分野にわたつて伝統的系譜がたどれるものは、素材であり、技術であり意匠である。前年より引き続き意匠の面に於てこれを調査研究している。

3 上代絵画の研究

上代絵画の現存作例のうちで重要な位置をしめる堂塔壁画について、その技法に主として留意しつゝ唐招提寺金堂、薬師寺東塔、室生寺食堂、その他中世寺院の諸例を調査した。

4 南都仏教絵画の研究

教学的背景と絵師の問題を中心に、中世仏教絵画の諸相を研究するもので、本年度は東大寺、秋篠寺、円照寺など奈良市内30余寺の寺院調査を中心に、資料収集をおこなつた。

5 仏像納入文書集成の調査研究

本年度は峯定寺・釈迦如来立像、大蔵寺地蔵菩薩坐像、春覚寺地蔵菩薩立像、西方寺薬師如来立像などについて調査を行い、また収集資料の整理、検討をした。(本文20頁参照)

6 奈良様彫刻の研究

南都造像史研究の一環として奈良様彫刻の形成とその伝流について調査研究するもので、本年度は秋篠寺、法華寺、大安寺、海竜王寺、白毫寺、東明寺、河内竜泉寺等の諸像を調査した。

7 その他の調査

伊勢市教育委員会の要請にもとづき、同市等観寺不動院など6ヶ寺について共同調査をおこなつた。

II 歴史研究室

1 仁和寺所蔵古文書経典等調査

昭和33年度以来継続して調査を行つてきた。現在仁和寺の古文書・経典は霊宝館・御経蔵・塔中蔵の3ヶ所に収められているが、霊宝館・御経蔵の調査は完了し、目下塔中蔵の調査に着手している。39年度の調査を含めて塔中蔵収納聖教の中、8割余を調査しえたが、聖教の他に多数の版本・外典の類があり、40年度以降も継続調査する必要がある。

2 秋篠寺本堂小屋裏発見木札の調査

完形品、断片合せて多数の木札が発見された。その整理接合を行つたところ、その数は300点となつた。それらの内容は史料的に興味深いものがあるから、詳細を本文中に掲げた。(本文4頁参照)

3 薬師寺収蔵庫建設地発掘調査

薬師寺が昭和40年1月11日から3月6日にかけて同寺講堂北東、現本坊前面(東方形)及び養徳院前面西(西方部)水田に収蔵庫を建設するため発掘調査を行つたので、歴史及建造物研究室が指導した。調査の結果、西方部には整地層がみられ、トレンチ内に3棟分の柱列及び井戸3基、土敷ケ所を検出した。東方形は、整地層がみられず、井戸2基を検出したのみで、建築遺構は全くみられなかつた。

なお、東方形南の排水溝に掘立柱が出土、南方部に遺構が予想された。西方部の遺構及び井戸は、出

土遺物より平安末～鎌倉時代のものとして推定される。

4 鳥羽離宮発掘調査

歴史研究室と建造物研究室とは、昭和39年2・3月にわたり、京都府文化財保護課が行った鳥羽離宮跡発掘調査に指導協力した。前年度に出した苑路と池汀との南方で、桁行7間、梁間3間、周囲に縁側をとりめぐらした建物の痕跡と西北隅に廊らしい建物のとりついでている様子が見られ、この建物の東・南に庭園のあること、去年の池汀はこの建物を東から南へと、とりかこんでいることがわかった。そしてこの建物跡を文献上の鳥羽南殿の証金剛院御堂と推定した。

Ⅲ 建造物研究室

1 解体修理に伴う調査

奈良県教育委員会に協力して、興福寺北円堂・法隆寺綱封蔵の遺構・遺跡の調査をおこなった。

2 秋篠寺本堂の調査

秋篠寺本堂の遺構について調査をおこなった。(本文1頁参照)

3 奈良市内古民家・古社寺の調査

奈良市教育委員会の依頼によって、不退寺南門、多宝塔・本堂などや、奈良市内の古民家・古社寺の調査をおこなった。

4 小堀遠州造宮関係資料収集

小堀遠州の造宮に関する資料収集は、従来各種の方法により行ってきたが、今年度は主として次のような調査を行った。

a 遠州の書状により作事に於ける伝遠州参劃の可

能性を究明した。殊に公儀準公儀の作事に關しては、それが賦役的役割にすぎなかったか、或は技術的方面で設計のみにたづさわったものか、或はしばしば現場に出掛けて施工を指導したものかなどを調べた。例えば京都南禅寺金地院、近江の水口城、江戸品川御茶屋、大和の興福院の場合の如きである。

b 茶道具の添書状や附属品(額や風呂先屏風など)により、その茶道具が専属していた茶座敷の名称やその使い方の推定。例えば於大名と転合庵、転合庵専用の風呂先屏風と養保庵との関係、転合庵の制札など。

c 陽明文庫蔵茶座敷の起し絵図、松屋会記、甫公伝書茶湯秘抄其の他茶書に掲げられた茶座敷の平面や立面を孤蓬庵蔵茶点無尺蔵などの寸法と比較検討する。

d 寛文5年から元祿14年までの間に、尼ヶ辻から現地(奈良市法蓮)に移された興福院の建築のうち、本堂、庫裡及び四脚門の構造及び関係古文書を調査し、それらの建物がすべて幕府の社奉行及び郡山城主諒解の上で、準公儀作事として行われ、本堂には遠州揮毫の扁額(紙本原本も同寺所蔵)があること、本堂供養に当つて遠州が奉行(世話役)と足輕数名派遣していること、四脚門は本堂と同じ矢田村大工作右衛門などであることなどが判った。

5 竜泉寺庭園実測図

大阪府富田林市字竜泉の、嶽山山腹にある竜泉寺

は、南北朝時代に楠氏が山頂に城を構え、その後、後村上天皇も時折訪ねられた由緒ある古跡であり、且つ赤坂千早の城跡や金剛葛城連山の眺望地点としてもすぐれた景勝地である。山麓の湧泉は大昔から著名であり、同寺流記資財帳案、氏人連署解案(春日神社文書写)などによると蘇我大臣が開いた古利のあとと伝える。南楼門(重文)は鎌倉時代の建立で、東西に阿吽の仁王像(建治元年紀銘)を安置している。本堂(元金堂跡)と南楼門との中間、両者を結ぶ線上の東寄りにある小基壇上に、塔心礎らしき礎石があり、それと対称の位置にも土壇があり曾ての東西両塔跡かと思われる。庭園は本堂の西方に展開している。

古社寺の浄土式池庭は、主に祠堂前面に布置されるのが例であるが、このような側背面に配置されているのは、湧泉の位置と、その清水と、それよりの流水を東側堰提の構築によって湛えた園池が、堂塔配列以前にあったことを思わせるようである。池水はその西北隅から湧出する水脈によって涵養され、そのさしわたし、南北63m東西44m、水面は約500㎡。現在その中に南北ほど一列に並ぶ三個の中島があり、中央が最大、本堂西側から木橋をかけ、他の小島には中央の島から巾狭い橋でつないでいる。弁才天、叱天、聖天の三社が勧請されている。同寺には寛文9年に書かれた古図があるが、現況とあまり変っていない。南北朝時代を降らない庭園遺跡と推定される重要な文化財であることに間違いはない。

6 奈良市内における庭園調査

従来詳細な調査のすんでいない奈良市内の古庭園のうち、仏池院跡（善阿弥作庭・現知事公舎）、摩尼珠院（中山製鋼用地）など中世庭園遺跡が雪消沢―緑ヶ池水系上にあること、小堀遠州らが肝煎して尼ヶ辻に創建し、寛文5年以降現在地に移った興福院の現況などを確かめることができた。

C 研究発表

1. 昭和39年5月16日（於本所）
昭和38年度における平城宮の調査
文化財と写真測量
沢村 仁
牛川喜幸
2. 昭和39年11月7日（於本所）
天平の木画師について
平田 寛
鈴木 充
3. 昭和39年9月5日（於現地）
平城宮跡発掘調査（朱雀門跡および第二次内裏北辺）報告会
岡田茂弘
本村豪章
4. 昭和40年2月13日（於現地）
平城宮跡第21・22次発掘調査報告会
鈴木 充
八賀 晋

二 組 織

A 文化財保護法 抜萃（昭和二十五年五月三十日）
（法律第二二四号）

- 第二十条 委員会の附属機関として文化財専門審議会、国立博物館及び国立文化財研究所を置く。
- 第二十三条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う。
- 2 国立文化財研究所の名称及び位置は、左の通りとする。

奈良国立文化財研究所要項

D 昭和39年度文部省科学研究費交付金による研究

研究課題	種類	研究担当者	交付金
中世に於ける寺院制度の研究 ―旧仏教系寺院を中心にして―	各個研究	田中 稔	100,000 円
日本古代の手工業技術に関する文献的研究	〃	狩野 久	60,000 円
鎌倉時代仏堂の構架と野小屋の発展	〃	工藤圭章	90,000 円

する。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京 都
奈良国立文化財研究所	奈良 市

- 3 国立文化財研究所には支所を置くことができる。
- 4 国立文化財研究所及びその内部組織は、委員会規則で定める。

B 奈良国立文化財研究所組織規程

（昭和二十七年三月二十五日）
（文化財保護委員会規則第五号）

沿革

- 昭和二十九年六月二十九日文化財保護委員会規則第一号改正
- 昭和二十九年九月一五日 第二号改正
- 昭和三十六年九月一五日 第三号改正
- 昭和三十八年四月一〇日 第四号改正
- 昭和三十九年三月一二日 第一号改正
- 昭和四〇年三月三一日 第二号改正

（奈良国立文化財研究所の組織）

- 第一条 奈良国立文化財研究所の所掌事務を分掌させるため、庶務課、次の三室及び平城宮跡発掘調査部を置く。
- 美術工芸研究室
建造物研究室

歴史研究室

- 2 平城宮跡発掘調査部に、その所掌事務を分掌させるため、次の六室を置く。
- 第一調査室 第二調査室
- 第三調査室 第四調査室
- 保存整理室 史料調査室

（庶務課の所掌事務）

- 第二条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。
- 一 別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における職人の人事に関すること。
- 二 公文書の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 三 経費及び収入の予算、決算その他会計に関すること。
- 四 行政財産及び物品に関すること。
- 五 職員の福利厚生に関すること。
- 六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

（美術工芸研究室の所掌事務）

- 第三条 美術工芸研究室においては、絵画彫刻、工芸品、書跡その他建造物以外の有形文化財及び工

芸技術に関する調査研究並びにその結果の普及及び活用に関する事務をつかさどる。

(建造物研究室の所掌事務)

第四条 建造物研究室においては、建造物に関する調査研究並びにその結果の普及及び活用に関する事務をつかさどる。

(歴史研究室の所掌事務)

第五条 歴史研究室においては、考古及び史跡に関する調査研究並びにその結果の普及及び活用に関する事務をつかさどる。

(平城宮跡発掘調査部の六室の所掌事務)

第六条 第一調査室、第二調査室、第三調査室及び第四調査室においては、所長の定めるところにより分担して、平城宮跡の発掘及び調査研究並びにその結果の普及及び活用に関する事務をつかさどる。

2 保存整理室においては、平城宮跡の遺構及遺物の保存整理及び調査研究並びにその結果の普及及び活用に関する事務をつかさどる。

3 史料調査室においては、平城宮跡に関する史料の収集及び調査研究並びにその結果の普及及び活用に関する事務をつかさどる。

(所長)

第七条 奈良国立文化財研究所に所長を置く。

2 所長は、所務を総理する。

附 則

この規則は、昭和四十年四月一日から施行する。

三 研究 成 果 刊 行 物

奈良国立文化財研究所学報

年 度	名 称	担 当 者
昭和29年度	第一冊 仏師連慶の研究	小林 剛
昭和30年度	第二冊 修学院離宮の復原的研究 第三冊 文化史論叢	森 蘊 小林剛・森蘊・杉山信三・田中一郎・田中稔
昭和31年度	第四冊 奈良時代僧坊の研究	浅野 清・鈴木嘉吉
昭和32年度	第五冊 飛鳥寺発掘調査報告	浅野 清・杉山信三・坪井清足・鈴木嘉吉
昭和33年度	第六冊 中庭園文化史	森 蘊
昭和34年度	第七冊 興福寺食堂発掘調査報告 第八冊 文化史論叢	坪井清足・鈴木嘉吉 小林 剛
昭和35年度	第九冊 川原寺発掘調査報告	小林 剛・守田公夫・浜田 隆・杉山二郎
昭和36年度	第十冊 平城宮跡Ⅰ・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告	杉山・坪井・鈴木・田中(稔)・工藤・田中(琢)
昭和37年度	第十一冊 院家建築の研究 第十二冊 巧匠安阿弥施仏快慶 第十三冊 寝殿造系庭園の立地的考察 第十四冊 「レース」と「金龜舍利塔」に関する研究 第十五冊 平城宮発掘調査報告Ⅱ ——官衙地域の調査—— 第十六冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ ——内裏地域の調査——	杉山信三 小林 剛 森 蘊 守田公夫 坪井・鈴木(嘉)・田中(稔)・工藤・田中(琢) 岡田・狩野・河原 榎本・坪井・田中(稔)・工藤・沢村・田中(琢) 岡田・狩野・河原・岩本

奈良国立文化財研究所史料

昭和29年度	第一冊 南無阿弥施仏作善集複製	田沢 坦
昭和30年度	第二冊 西大寺教尊伝記集成	小林 剛
昭和38年度	第三冊 仁和寺史料 寺誌編一	田中 稔・狩野 久
昭和39年度	第四冊 俊乘房重源史料集成	小林 剛

四職員

(昭和40年10月1日現在)

所屬	氏名	官職	担当・専攻
庶務課	小林 剛	文部技官	所長
	西村 泉治	文部事務官	課長補佐
	紺野 栄	同	庶務係長
	坂口 義尚	同	會計係長
	八幡 扶桑	文部技官	(兼)
	岩本 次郎	文部事務官	
	井上 政和	同	
	丹阪 信次	同	
	木黄 忠雄	警務員	警務員長
	森田 光治	同	平城警備
	岡田 博元	同	同
	西田 健三	技能力員	自動車運転
	中西 建夫	同	同
	渡辺 衆芳	技術補佐員(非常勤)	同
	今西 正美	事務補佐員(非常勤)	同
	森田 末	同	同
	大西朝次郎	同	同
	米山ゆう子	同	同
	脇野 京子	同	同
	宝来三恵子	同	同
美術工芸研究室	鈴木 康子	同	庶務
	守田 公夫	文部技官	庶務
	平田 寛	同	庶務
	長谷川 誠	同	庶務
建造物研究室	石沢 正男	研究員(非常勤大和文華館)	美術・工芸
	森 鑑	文部技官	彫刻
	工藤 圭章	同	建築
	沢村 仁	同	建築
	鈴木 充	同	建築
	牛川 喜幸	同	遺跡庭園

所屬	氏名	官職	専攻
歴史研	杉山 信三	文部技官	建築史
	坪井 清足	同	古史
	田中 琢	同	古史
	田中 琢	同	古史
	岡田 茂弘	同	古史
	狩野 久	同	古史
	河原 純之	同	古史
	八賀 晋	同	古史
平城宮跡発掘調査部	榎本亀治郎	同	遺跡庭園
第一調査室	森 蔵	同	古史
	守田 公夫	同	古史
	杉山 信三	同	古史
	横山 浩一	同	古史
	岡田 茂弘	同	古史
	鈴木 充	同	古史
	藤井 功	同	古史
	猪熊 兼勝	同	古史
	高島 忠平	同	古史
	原 秀三郎	同	古史
第二調査室	阿部 滋平	同	古史
	牛川 喜幸	同	古史
	木村 豪章	同	古史
	三輪 嘉六	同	古史
	石井 則孝	同	古史
	横田 義章	同	古史
	村上 節一	同	古史
	沢村 仁	同	古史
第三調査室	河原 純之	同	古史

所屬	氏名	官職	専攻
整理史料室	佐原 真	文部技官	古史
	伊東 正可	同	古史
	玉井 大作	同	古史
	藤原 武力	同	古史
	杉山 信三	同	古史
	八賀 晋	同	古史
	工業 普通	同	古史
	森 郁夫	同	古史
	栗原 和彦	同	古史
	加藤 優	同	古史
	細見 啓三	同	古史
	真鍋 俊照	同	古史
	坪井 清足	同	古史
	田中 琢	同	古史
	山沢 義章	同	古史
	八幡 扶桑	同	古史
	佐藤 幹雄	同	古史
	田中 稔	同	古史
	狩野 久	同	古史
	清野 拓	同	古史
	鬼頭 明	同	古史
整理保存室	佐原 真	文部技官	古史
	伊東 正可	同	古史
	玉井 大作	同	古史
	藤原 武力	同	古史
	杉山 信三	同	古史
	八賀 晋	同	古史
	工業 普通	同	古史
	森 郁夫	同	古史
	栗原 和彦	同	古史
	加藤 優	同	古史
	細見 啓三	同	古史
	真鍋 俊照	同	古史
	坪井 清足	同	古史
	田中 琢	同	古史
	山沢 義章	同	古史
	八幡 扶桑	同	古史
	佐藤 幹雄	同	古史
	田中 稔	同	古史
	狩野 久	同	古史
	清野 拓	同	古史
	鬼頭 明	同	古史
第四調査室	佐原 真	文部技官	古史
	伊東 正可	同	古史
	玉井 大作	同	古史
	藤原 武力	同	古史
	杉山 信三	同	古史
	八賀 晋	同	古史
	工業 普通	同	古史
	森 郁夫	同	古史
	栗原 和彦	同	古史
	加藤 優	同	古史
	細見 啓三	同	古史
	真鍋 俊照	同	古史
	坪井 清足	同	古史
	田中 琢	同	古史
	山沢 義章	同	古史
	八幡 扶桑	同	古史
	佐藤 幹雄	同	古史
	田中 稔	同	古史
	狩野 久	同	古史
	清野 拓	同	古史
	鬼頭 明	同	古史